

第十一部会

旅順博物館所蔵の漢文無量寿経写本

三 谷 真 澄

中国旅順博物館（旅博）には、二〇世紀初頭の大谷探検隊が収集した中央アジア出土の仏典断片が多数所蔵され、五二冊の藍色ファイル（藍冊）等種々の方法で保管されている。総計約二万六千点の断片資料中、漢文浄土教写本は一六六点を数えることができる。

従来、大谷隊収集の浄土教写本については、『二葉叢書』第一号に活字移録された八一点が知られ、藤田宏達氏の大著『浄土三部経の研究』でもこの録文が参照されているが、その所在は明らかにされていない。しかし、龍谷大学と旅博との共同研究の成果として図録が出版され、それらが「浄土一」と題された藍冊に貼付保管されていることや、これらに加えて八五点の写本断片があることが判明した。その中には、浄土教写本中、最古層に属する初期（無量寿経）（以下、無量寿経類諸訳を「無量寿経」と総称）の写本断片も含まれる。

本発表で取り上げる五断片は、『大阿弥陀経（大阿）』、『無量清浄平等覚経（平等）』ははじめ大正蔵に収載される（無量寿経）のいずれとも決定しがたい写本である。書体や紙質、界高等の総合的分析から三世紀末から五世紀前半に書写された、初期

〈無量寿経〉の同一写本の離片であることは疑いない。第一断片は、『大阿』・『平等』とほぼ一致するものの、両経にない「〔無量〕壽佛國」という用語が見え、他の断片は、比較的『平等』に近いテキストとなっている。従ってこの写本は、訳語の一部が現行漢訳にないとしても、『平等』の一写本であって、単なる誤写に過ぎず、異訳とまで言えないという指摘もあり得る。

しかし、相互に非常に類似したテキストをもつ『大阿』と『平等』とが、当然の如く初期〈無量寿経〉の二訳として扱われているように、「〔無量〕壽佛國」（旅博写本）か、「阿彌陀佛國」（『大阿』）か「無量清浄佛國」（『平等』）かは、単なる訳語の相違とは言えない重要な相違であり、異訳として扱ったとしても非難されることはないであろう。当該写本は、大正蔵では『大阿』（大正二二、三二二頁中二八―下二六）、『平等』（同二九三中一六―下一四）にあたり、欠損部分を補足すれば四二〇字分に相当する。現行の『無量寿経』の平行箇所（同二七四中一八―二二）は、五八字に過ぎず、大幅に短くなっているが、旅博写本で「〔無量〕壽佛國」とある部分が「無量壽國」となっている点が注目される。

一方、新疆ウイグル自治区博物館には、旅博写本とは別写本であるが、明らかに「無量壽佛國」と訳出されている同系統の初期〈無量寿経〉写本が所蔵されており、『大阿』や『平等』とは別系統の翻訳の存在を示唆している。本写本の経題や奥書が見つかっておらず、現時点で訳者を確定することはできないが、トルファン出土の古写本群の中に、元康六年（二九六）書

写の『諸仏要集経』をはじめ、竺法護訳の仏典が多数発見されていることが、何らかの手がかりとなるかも知れない。

竺法護訳の初期〈無量寿経〉写本が実在する場合、①『大阿』訳出（支謙（二二二—二五三の間）あるいは支婁迦讖（一七八—一八九の間）、②『平等』訳出（帛延（白延）二五六—二五九頃）、③竺法護訳成立（三〇八年）↓写本として流布、④無量寿経として『道安録』に記載（三七四年頃）という経過をたどった結果、竺法護訳は失われ、『大阿』と『平等』のみが「五存」の二訳として残されたことになる。

いずれにしても、旅博所蔵写本の中に、現存最古級の初期〈無量寿経〉写本の存在が確認されたことは疑いなく、今後、当該經典の成立や翻訳の系譜の再構築を促す可能性を秘めている。

（拙稿「旅順博物館所蔵の浄土教写本について」『国際文化研究』（龍谷大学国際文化学会）一二、二〇〇八、二九—四四頁参照）

『医心方』と『外台秘要方』

多 田 伊 織

本発表では、佚書『僧深方』の輯佚を通して、大部の医学全書である日本の『医心方』と唐の『外台秘要方』の編纂意図の違いと、同じ『僧深方』が、二書の間ではどう異なるか、そして六朝期、劉宋から南斉の間に活躍したとされる僧侶「僧深」

の手になる『僧深方』が一体いかなる医学書であったかを、考察したい。

丹波康頼『医心方』三十卷（永観二年 九八四年進上）は、現存する日本最古の医学全集である。先行する中国・朝鮮・日本の医学書からの引用で成り立つ本書は、唐・王燾の『外台秘要方』四十卷（天宝十一載 七五二年成立）との類似性が以前より指摘されている。

『医心方』と『外台秘要方』が、すでに散逸した唐代までの古医書の宝庫であることは言うまでもない。『隋書』経籍志に三〇巻と著録される『僧深方』は、藤原佐世『日本国見在書目錄』（寛平九年 八九七年までに成立）にも「方集 廿九 尺僧深撰」として著録されている。『医心方』が重要なのは、北宋の校正医書局による改訂を経ていない、遣唐使将来の原本の系統から引用されている点である。今利用できる最も古い『外台秘要方』でも、校正医書局の改変を受けた、北宋もしくは南宋初まで下がった時代の版本である。

幕府医学館で幕末に半井家本『医心方』模刻が行われた際、『医心方』は単方を中心とすることが注意されていた。『僧深方』輯佚に当たって、同じ症状に対する『外台秘要方』と『医心方』の処方相違を検討しているが、『医心方』所引の『僧深方』は、単純な処方ものを多く選んでいる。これは日本医学の後進性を示すというより、処方が簡単で、すぐに使える単方を、丹波康頼が選んだ、と考えている。単方をまとめた医書は需要があり、『隋書』経籍志にも、北魏・王頊の『王世荣单方一卷』、隋・許澄『備急单要方三卷』などが見える。ただし、